

「佐橋甚五郎」論

An Essay on "Sahashi Jingoro"

佐々木 充

Mitsuru Sasaki

本作品は、大正二年四月「中央公論」に発表された鷗外の歴史小説第三作である。六月、「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」とともに作品集『意地』（靱山書店）に収められ刊行された。¹⁾

この小説の素材については、すでに早く尾形仂氏の先駆的な教示⁽¹⁾があり、最近には松浦武氏⁽²⁾、山崎一穎氏⁽³⁾の追跡調査によつて尾形氏の欠が補われ、その全貌が明らかになつたのは、有難いことであつた。三氏の調査を要約すれば、鷗外が依拠した中心的資料は、「佐橋甚五郎」執筆直前の大正二年二月二十八日付で刊行された『通航一覽』の巻之八十七であり、補助資料として『徳川実記』『韓使来聘記』を参看したらしいということにならう。

ここでは、資料のことはかかる先蹤のお仕事の上に安んじて立たせていただいて、一人の読み手としての私の、作品読解を記してみたい。

一 喬僉知は佐橋甚五郎であるか否かをめぐって

これまでに書かれた「佐橋甚五郎」論を通覧して印象に残るのは、上々官喬僉知が佐橋甚五郎であつたか否かについて、読みが完全に二つに分れているということである。一つは紅野敏郎氏や大庭米治郎氏や尾形仿氏・須田喜代次氏・杜木武氏・山崎一穎氏などによる、喬僉知は甚五郎であるとする読み（喬僉知が甚五郎か否かに疑義を呈さぬ読み）であり、他は稲垣達郎氏・渋川驍氏・板垣公一氏・竹盛天雄氏・小堀桂一郎氏などによる、作者は喬僉知が甚五郎か否か明らかにしないまま擱筆しているとする読みである。概して言えば、前者は作品

を肯定的に評価し、後者は否定的に評価する傾向を示している。この要素の読みの違いは、作品の評価に直結する結果を導いている。この点の検討から始めるゆえんである。

私が前者・後者のいずれに与するかは、本小論全体が示すことになるが、前もって記しておけば、前者を立場としてしている。

後者——作者は喬僉知が甚五郎か否か明らかにしないまま擱筆して
いるという読みに立つ方々の、その読みの過程は、むろん同じではな
い。その結論も、仮りに右記のように最大公約数ふうに括つて言つて
みたが、実際にはそれぞれ独自の言い方で示されている。稲垣氏は「我
々は朝鮮人參の一件をおさえてみても九分通りまで喬僉知＝甚五郎と
みてさしつかえなかった。しかし鷗外は、最後になにがしかの疑問を

投げ出し、そうと断定していない(略)。幾種類かの資料操作の上、事実と不明の個所をえりわけつつも、やはり甚五郎＝喬兪知と考えるのが、歴史の『自然』であろうと思つたのだ。」とかなり微妙な言い方をされるが、「なにがしかの疑問を投げ出し、断定していない」と明記されたところを採らせていただいた。渋川氏は「甚五郎が、喬兪知であるか、ないかによつて、モチーフは、二つに分かれてゆく。それを充分、歴史性に即することによつて、発展させることが可能ではなかったか。それを鷗外は放棄して、その責任を史料のないことに負わしている。」と記しておられる。板垣氏は、「喬兪知が甚五郎であつたかどうか断定していない。『謎解き』は途中で放棄されたと言える。」と判断され、竹盛氏は「(略)時間はもう一度ふり出しに戻る。と同時に、喬兪知は甚五郎なりしやという問題がふたたび日程に上るわけである。しかし、歴史小説作家鷗外は、この点については、もはや禁欲的で見保留のまま物語を閉じてしまうのである。」と読まれ、小堀氏は「作家としては自分の意のままに虚構を架設して話をひろげることが容易だつたであらうが、鷗外はすでに史料の自然に対して十分慎重になつてゐた。そして謎のままに残すといふ態度を以てこの一篇を締め括つてゐる。」と考えておられる。

このように各氏、それぞれのニュアンスで言っておられるのであるが、そのような結論を導いた根拠はほぼ推定できるのであつて、この作品「佐橋甚五郎」の末尾をどう読むかというところにそれはあると思う。確認のため通行の本文を引用してみる。引用は二段に分かれていて、前の一段は作品本文の最終段落で、前の段落との間に一行のあきを置いて記されている完全に独立した段落であり、後の、また一行あき、二字下げで記されてある段落は、そのような形で本文の後に置かれた作者鷗外の附記(とここでは仮りに呼んでおく)である。こういう形をとつて、「佐橋甚五郎」は終結しているのである。

天正十一年に浜松を立ち退いた甚五郎が、果して慶長十二年に朝鮮から喬兪知と名告つて来たか。確かな事は誰にも分からなんだ。佐橋家のものは人に問はれても、一向知らぬと言ひ張つた。併し佐橋家で、根が人形のやうに育つた人參の上品を、非常に多く貯えてゐることが後に知れて、あれはどうして手に入れたものかと、訝しがるものがあつた。

此話は「続武家閑話」に拠つたものである。佐橋家の家譜等では、甚五郎は夙く永禄六年一向宗徒に与して討死している。「甲子夜話」には、慶長十二年の朝鮮の使に交つてゐた家康の旧臣を、寛又蔵だとしてある。林春斎の「韓使来聘記」等には、家康に謁した上々官を金、朴の二人だけにしてある。若し佐橋甚五郎が事に就いて異説を知つてゐる人があるなら、その出典と事蹟の概要とを書いて著者の許に投寄して貰ひたい。大正二年三月記。

こういう文章を見ると、我々はほとんど反射的に、例の「歴史其儘・歴史離れ」をそのまま適用してしまふ。するとこの「附記」は正直に手のうちを開いてみせた、歴史愛好家の真率な打明け話・あとがきに見える。ことにも最後の、「異説」を知っている人への呼びかけなどが、そうした気配を疑うべからざるものに仕上げてゐる。そして、そういう読み方に従えば、このコメントは、鷗外自身が喬兪知なる存在にかならずしも信を置いていないのだなという方向に、自然と読者の読み方を規制するだろう。「附記」とはいえ、——というよりは、「附記」ゆえに読者は、作品本文よりもより注意深く、この部分を読むだろう。するとその読みが、たちまち直前の、作品本文の最終段落の読解を規定しにかかる。「確かなことは誰にも分からなんだ。」——作者だって、鷗外だってそうなのだから。「訝しがるものがあつた。」——

確かに訝かしい、鷗外も作者としてさえはつきりしないといっているのだからな。鷗外は、喬倉知が甚五郎だとはつきり書いていない、謎として残したのだ、というように。

右のような作品末尾の理解が、次には作品全体をふりかえらせる。

——となれば、そこまで作者が書いてきた佐橋甚五郎なる人物にまつわるストーリーは何だったのだろう。何か妙なことになるな。この作品はどこかに計算違いのある作品なのではないか。たとえば「甚五郎が、喬倉知であるか、ないかによって、モチーフは、二つに分かれてゆく。それを充分、歴史性に即することによって、発展させることが可能ではなかったか。それを鷗外は放棄して、その責任を史料のないことに負わしている。そのため、せっかくの冒頭の、家康の面会の場面が、強く生きてこないのだ。」(渋川氏)などと。

鷗外は決して、資料の少ないことを啣ったり、少ないことを理由にして自分の作品をいびつのままに生み出したりはしていないと思う。もし資料が不足だと思ったら作品など書かなかったろうし、資料を見て、それで想像力が動き始めたからこそ作品が書き上げられたのだろう。資料と想像力の発動との関係は、神変不可思議と考えておいてよいのではないか。〈歴史其儘・歴史離れ〉も機械的に当てはめるのは危ういと思う。

文学ジャンルの中でもっとも若い小説は、もっとも純粹から遠いとは、よく言われることである。実生活にすぐ隣して猥雑なジャンルである。小説に定まった形はなく慎みなく貪婪なジャンルであると。それゆえに〈虚構〉を核とするのだろう。右の「附記」にしても危ういのではないだろうか。作者は素顔を見せているふりをして、実はもう一つ仮面をかぶってはいしないのか。〈隠すことと顕わすこと〉に、いかに巧緻をつくすかが、作り手の仕事なのだから。

そのような見方に立てば、この「附記」は一種の不在証明工作とも読めることになる。顕わすことが、隠すことになる。

詳細をここにくり返す余裕はないので、それぞれに当たっていたく外ないが、冒頭に記した尾形・松浦・山崎各氏の調査を総合すれば、この「附記」で鷗外は、自分が直接に(というよりは「本当に」と記すべきか)参看した文献資料名「通航一覽」¹³を隠す結果になっている。いかにも手のうちをさらす形をとりながら、肝腎なものを隠してしまっているこれが、はたして鷗外のペダンチックな意識的行為であったか作家魂のしからしむる本能的行為であったか、容易には判断はできないが、いずれにしろここで鷗外は、隠と顕の遊びをひそかに遊んでいる。そして後にも触れるが、この隠顕の遊び——神話・伝説以来連綿として続く強力な趣向・発想が、この小説の基本モチーフなのではないかと私は思う。鷗外を師の一人と仰いだ芥川龍之介が、この五年ほど後に、作品「奉教人の死」(大正七年九月「三田文学」)の未段で、「予が所蔵に関する、長崎耶穌教会出版の一書、題して『れげんだ・おうれあ』なるものを創り出して遊びつつ、おのれの主人公を真実の世界の住人に昇華せしめたように。しかし鷗外と龍之介が違うのは、鷗外のこの「附記」には、歴史愛好家の〈事実〉への固着もまた同時に示されていて、それがこの「附記」を「奉教人の死」の第「二」章に比べて文学の方法としての徹底を欠くものになっているということである。

ところで、この「附記」に書かれている内容はいえ、自分が依拠した「続武家閑話」という資料以外の記録によれば、慶長十二年という年にはすでに佐橋甚五郎は存在せず、来聘使に混っていた日本人とは別人だった、または上々官は三人ではなく本当は金・朴の二人だけだった、と、要するに、それまで営々と作り上げてきたおのれの主人公の存在を根底からくつがえすデータばかりである。これは一見、作者に非常な不利な材料ばかり並べたことになるが、しかしそれがそうとばかり働かない。読者は自問自答する。そういう不利な材料がある中で、なお作者は「佐橋甚五郎」を書き上げている。たしかに歴史

は捉え難い、記録は区々にわたるだろう、ならばこのデータは作者の設定を完全否定する根拠にはならないのではないかと。ここでも隠と顯は逆転する。否定的要素が、読者の裡でかえって逆の要素として働く。

作品本文最終段の機能も同じだろう。作者は、甚五郎が不断に小判百両を身につけていたという、思いがけない記事を記し、それゆえ朝鮮への出国も可能だったというのを匂わせ、突然そこに一行の空白を作り、この一段を記す。喬兪知を甚五郎だといったのは家康ただ一人で、傍証はないのだ。佐橋家に高級・多量の朝鮮人参があるという噂だがまあ噂ですからね、と。やはりそれまでの小説叙述をくつがえす方向性をもった記述にはかならない。がここでもこの臚化法が逆に働くのである。余人のことならともかく、見抜いたのが老辣無双・人世の表裏を知りつくした家康なのだからその眼に狂いはあるまい。噂は確かに当てにはならないが、しかし煙は火なしには立たぬではないか、などと。作者は、読者に不安を与え、惑乱させることで、おのれの思う方向へ読者を導くという老獪な方法をこの作品末尾で企画したのである。そもそも、喬兪知なる、資料に一切名前の出てこない人物を第三の上々官として作り出したところに、作者の計画は明らかになっているといつてよいので、もし、真に臚化させるのなら、資料に出てくる金兪知・朴兪知のいずれかを目して家康が佐橋だと言うことにしても、いっそう構わないのである。その方が、〈歴史其儘〉に近いのだ。「佐橋甚五郎」は、喬兪知Ⅱ甚五郎でなければ作品として成り立たない。「家康の僻目」で、さすがの家康も老いには勝てず、白昼に幻を見たとなれば別であるが、それなら物語は家康の独り道化の茶番劇としてか、駿馬も老いては……という低級な風刺劇ないし教訓劇のようなものにならざるをえないであろう。しかし「佐橋甚五郎」にはそのどちらの要素もない。主人公も家康ではなく甚五郎だ。

確かに家康以外の誰もが、喬兪知が甚五郎だとは思わなかったわけ

だから、家康の判断を支える傍証はなにもない。彼の判断は宙に浮いているといつてもよい。だがその微妙な一線、家康だけが直覚した「隠顯」する気配があつたとしなければ、何も始まらないというところに問題はある。それはこの小説がどのように開始されていたかを見ればよくわかる。そして家康の直覚を僅かに支えるものは、佐橋家の上品・多量の朝鮮人参の噂である。人参は何事も語らない。語らないが上品・多量の人参が「隠顯」のモチーフを負って佐橋家に存在するのは――、間違いないだろう。

佐橋家の人参同様、みずからは一語も発しないが、厳として存在するのは喬兪知という上々官である。佐橋家の人参がただの人参でなく〈上品・多量〉であることによって、厳として一つの意志を示すように、喬兪知は無言のまま「喬」と名乗っている。作者はこの三人目の訳官に、どのような朝鮮姓を名乗らせてもよかったのである。にもかかわらず「喬」と名乗らせた。いうまでもなく「喬」は「橋」と同音、そして「橋」から木篇を外したものである。作者はここでは文字の遊びを遊んでいる。遊んでいるのだが、同時にそれはやはり、即座に「隠顯」のモチーフに重なり作品と深くかわつてくる。喬兪知は無言のまま雄弁におのれを語っている。巧みにおのれを隠しつつ同時に巧みにおのれを顯し示している。

喬兪知が甚五郎でなければ、鷗外がこのような遊びを遊ぶことはできないのである。

喬兪知が甚五郎か否か明らかにしないまま作者は擲筆していると読む理解の仕方に疑問を呈するうちに、作品内部に入りかけてしまった。すこし立ち戻って、喬兪知は甚五郎であるとする読み（喬兪知が甚五郎か否かに疑義を呈さぬ読み）の実際を確認しておく。大庭氏に代表になっていた。〈漢字・旧字体は新字体に改めた。〉

(略)『佐橋甚五郎』は僅か十頁にも足りぬ短篇であるが、含蓄的な表現力、作品としての密度では前作を凌ぐものがある。(荒筋部分、省略)

三百年にわたる徳川幕府の不動の礎を置いた家康である。家康の遺志はその間武家制度の隅隅にまで滲透して綿綿として命脈をつないできたのである。この遠い展望の下に治略を講じた周到綿密な政治家が測り知れぬ機鋒の閃きに眼を着けて、その才幹を操縦し、しかも警戒して身辺に寄せ附けない老獺な遣口、如何にもその人らしく描かれてゐるが、それよりも、偉業を成し遂げてやつと安住の域に達した老政治家の心に、朝鮮人上官喬兪知の姿がどんな暗影を投じたことだろう。厳しい綱紀を張ることを自己の課題とした家康にとつて危険人物であり、側において重用することを憚りながら、また「手放しては使」うことをおそれた佐橋、しかし生殺しに繋いでおかうとする鎖を断ち切つて遂に走つていつた、家康には寝ざめのわるい佐橋の姿がそこにあつた。それが今「朝鮮人になりすまし」、硬ばつた無表情な顔で広縁に坐し、上段の間に錦の茵を重ねて着座する家康を見てゐたのである。その冷たい眼にしかし家康の胸を刺す嘲笑の影があつた。作者はただ情況を略叙するのみで、それが家康の繊細な神経にどんな顫動を与へたかは、読者の想像に委ねてゐる。

家康に見られるやうな、意図を貫くために情を抑へ、力の限度を知つて危険を警戒し、常に悟性の道を踏みはづさぬ克明で地道な遣方は、決して鷗外に縁の遠いものではなかつた。(略)しかし鷗外にはまた一方、鋭氣人を凌ぐものがあつたこともいなめない。(略)抑へられれば反撃する負けじ魂も鷗外的一面である。さういふ点で、剛毅俊邁な佐橋甚五郎のごときも鷗外の心惹かれる人物であつた。(略)——機略に富む、飽くまで自信の強い傲岸な青年、それはすくなくとも往昔鷗外の胸に描いたことのある人物の

型だつたといつてもよいだらう。——結局家康も甚五郎も、鷗外に矛盾的に共存した二つの姿であつた。

『佐橋甚五郎』は小篇にすぎないが、家康の心の上に喬兪知の影を投げ掛け、その波紋のうちに、見えざる魂の振動を波立たせる文章のうまさに感心する。(略)鷗外のすぐれた説明的技法は、「佐橋甚五郎」において、心情の捉へ難い様相を言葉の極度の簡約で、しかも鮮かに彷彿する点で一段の進歩を見せてゐる。

喬兪知は甚五郎であつたという読み立脚してゐてなんの躊躇もみられない。尾形氏・山崎氏は、とりわけてこの作品の優劣に言及はされないが、その行文からは喬兪知は甚五郎だつたという設定に何らの異和も疑念も感じておられないと判断される。

杜本氏は、喬兪知と甚五郎の関係については右の三氏同様に解しておられ、改めてその点に触れることはないが、作品の完成度については、この点とは別の理由をあげて「厚みに乏しい、したがって巧緻ではあつても迫力に欠けるできばえ」と評される。

冒頭に記したように、作者は喬兪知を甚五郎と明示してゐないという解釈では、結局、作品「佐橋甚五郎」は振わない作品という評価に結びつき、甚五郎は喬兪知となつて家康の前に姿を見せたのだと読む場合には、秀作として遇される傾向を持つ。これはやはり興深い現象だと思ふ。

私は、小説はより面白く読みうる方向で解釈し享受したいと思うものであるが、そうなるとやはり、大庭氏の読みにひかれる。再度の引用で恐縮だが引く。

それが今「朝鮮人になりすまし」硬ばつた無表情な顔で広縁に坐し、上段の間に錦の茵を重ねて着座する家康を見てゐたのである。その冷たい眼にしかし家康の胸を刺す嘲笑の影があつた。(略)

それが家康の繊細な神経にどんな顫動を与へたか……

傍線部は大庭氏のものであつて鷗外のものではない。しかし、決して作品を傷つけぬばかりが、我々に、さもありなんという心すく思いを味あわせてくれる。(ただし、右の例でいえば「嘲笑の影」が浮ぶという解釈まで、私と同じくというのはない。大庭氏のなさったごとき読者による想像が、作者の創造と重なって新たな創造を可能にしているというその点についての心すく思いである。)大庭氏の読みには、久しぶりに復活した国際的な儀式の緊迫した静謐のただ中で、がつきと視線を組み合わせて、無言の戦いを闘っている二人の男が見える。巨濤相搏つ沈黙の劇を、大庭氏は読んでおられる。その面白さ。そのためには家康の目は老いてなお「僻目」であつてはならぬし、上々官喬兪知は佐橋甚五郎であらねばならぬのである。

二 甚五郎が守ろうとするもの

これも先蹤の論文に、「契約」という語が用いられているのを目にする。たとえば次のように。

佐橋の岡崎出奔の経緯をこのように描き出すことによって、鷗外は佐橋という人物を、『三河後風土記』以下の諸書の伝える如き慾心のためには手段を選ばぬ破廉恥漢ではなく、自己の能力に対する強い自信と相互信頼にもとづく契約をもつて行動を律するひとりのドライな若者とする、新しい解釈を打ち出したのである。(尾形氏)

甚五郎が撃つたのは、一羽の白鷺として措定されている自己自身の何かを撃つことであつたのだ。鷗外はこの鷺撃ち事件が甚五郎の運命の歯車を狂わせて行く転機として設定し、「賭」の実現のために朋輩殺人にまで突走ってしまう行動を写し出している。

「賭」を「契約」と見るならば、それにむけての一直線の行動は、一応の道理がとおつていなくもないが、鷗外は甚五郎の論理を容認しているようにも受けとれず、ただ、突き放して事実であるかのような筆致で提示しているだけだ。(竹盛氏)

お二人が「契約」という語を使つておられるのは、(竹盛氏の文には明らかにあらわれているように)、佐橋甚五郎が白鷺を銃撃する場面、甚五郎と蜂谷とが「賭」をする、その「賭」に対してである。

この鷺撃ちの場面は、「佐橋甚五郎」の物語が、「駿府城中、韓使、家康に謁見」の景から時間のフィルムを逆に捲いて、主人公・佐橋甚五郎が、はじめてその姿を我々の前に現わすところであつて、甚五郎のへんが読者の目に映ずる、最初の重要な場面であり、尾形氏の考察によつて、鷗外の創作であることが確かめられている。

「契約」といっても、現在の法律行為としてのそれでないことはいうまでもなく、古語にも見えるところの、約束・約定を意味するものとして両氏ともお使いのことはよく判るが、しかし、甚五郎と蜂谷の「賭」は「契約」といつてよいであろうか。本文にも、

小姓一人は鷺を撃つた跡で、お供をして帰る時、甚五郎が蜂谷に「約束の事は跡で談合するぞ」と云ふのを聞いた。

という箇所があつて、作者も「約束」という語を用いてはいるが、肝腎のその「談合」の場面では「約束」を守る守らぬで刃傷沙汰になつたのではなく、おのれの言葉を守るか守らぬか、つまり武士の体面・名誉が問題になつていたのである。

「武士が誓言をしたからは、一命をも棄てる。よしや由緒があらうとも、おぬしの身に着けてゐる物の中で、わしが望むのは大小ばかりぢや。是非くれない」と云つた。「いや、さうはならぬ。命ならいかにも棄てう。家の重宝は命にも換へられぬ」と蜂谷は云つた。「誓言を反古にする犬待奴」と甚五郎が罵ると、蜂谷は怒つて刀を抜かうとした。甚五郎は当身を食はせた。それ切り蜂谷は

息を吹き返さなかつた。

「誓言」なのである。何を賭けたかという約束が問題なのではなく、賭けるか、お賭けた、という、言葉が問題になつてゐるのである。そして、武士においてかかる場合の言葉とは、意志にほかならないし、意志とはまた、おのれそのものである。つまり、事は倫理にかかわつてくると思われるのだ。

相良享氏は、その著『武士道』⁽¹⁵⁾にいわれる。「武士が一言するにおいては、いかなる障害にも屈すべきではなかつた。いかなる他者の前にも、いかなる事態とならうとも、口外された一言は貫かれなければならぬのである。」一度約諾した上は、いかに事態が変化しようとも、また何ものをもすてても、あるいは神仏が干渉してきても、武士の約諾の一言は守られなければならなかつた。約諾を守るとは、自己の武士としての生命を守ることであつた。「武士が約諾の一言を重んじたのは、(略)弱みをきかう武士の意地からである。(本文改行)約諾を重んずることは信義の問題とうけとられるであろう。信義がいかなる構造性格をもつモラルであるかは改めて考えなければならぬが、ともかく約諾は明らかに他者とのかわり方の一つのあり方である。しかし、歴史的にみる時、武士が約諾の一言を重んじたのは、右にみるようにあくまでも自己の強み、意地とのかかわりにおいてであつた。」たとえそれがかりそめの一言であつても、武士がひとたび吐いた以上は、その言葉は貫かれねばならぬ。ましてこの鷺撃ちは、主君信康以下足輕に至るまでの、他者の面前での、その耳目に鮮やかに印象された出来事であつた。もし甚五郎が、蜂谷に「賭」の履行を迫らず不問のまま経過したとすれば、武士の面目を失ふのは、むしろ甚五郎の方なのではないか。甚五郎に、ドライな新しい人間を見るよりはむしろ、杓子定規といつていくらいに固く、武士の倫理を守ろうとする若待を見るべきなのではあるまいか。

改めて、鷺撃ちから蜂谷の死、そして甚五郎の出奔に至る一連の場

面に、甚五郎と蜂谷の「武士」が、どのように発揮されているかを確認してみる。

蜂谷の死体が発見された時、蜂谷の金熨斗附の大小が無くなつていて、代りに甚五郎のものらしい大小が置いてあつたと、鷗外は記す。これは尾形氏のいわれるように、甚五郎が「破廉恥漢」でないことを示すであろうが、もっと積極的に、甚五郎が武士としての容儀を正しく持っていたと読むべきところであろう。息をとめてしまったとはいへ、一個の武士を丸腰のままに置くのは、同じ武士としてあるべきことではないからである。そして、その前、まだ蜂谷が生きていて、「談合」が始まったばかりの時にも、甚五郎は、蜂谷の金熨斗附の大小を貰おうといつたあとに、鷗外は「それも只貰うのではない。代りに自分の大小を遣らうというのである」と甚五郎がいつたと記している。これも一見、取引きじみた印象をさせないでもないが、そう読むよりは、常住坐臥、両刀とともにあるをもつて、「武士」たることを、甚五郎が固く信じている事、それあるゆえに、蜂谷の大小とおのれのそれとを、ここに交換しようと提案していると読むべきだと思うのである。また、蜂谷に死をもたらししたのは、確かに甚五郎には違いないが、ここでも甚五郎における「武士」が、蜂谷の「武士」を凌駕していると思われる。死んだ蜂谷には気の毒ながら、彼にこそ武士の嗜の無さが問われねばならぬのではないか。当て身を受けて絶命したひよわさはもとより言わずもがな、最初に遡つていえば、「今ここに持つてゐるものをなんでも賭けう」といつた、その言葉の軽率さが、まず問題である。この時、彼等小姓は、主君信康の「物語」に扈從していたのであつて、このほとんど遊山に等しい外出に、どれほどの品を身に帯びていたであろうか。ほとんど腰の大小・印籠など、最小限のものしか所持していなかつたに違いない。まして平素から甚五郎は、蜂谷の大小を「褒めていた」のだから、甚五郎が「何か賭けるか」と云つた時、彼が何を想定しているかの、とつきの判断が、蜂谷にはできなかつたものか。「何か賭け

るか」に、反射的に「今ここに持つてゐる物をなんでも賭けう」と言つてしまうのは、武士としての不断の要慎に欠けるといわれても仕方なからう。翌日の「談合」でいくら「由緒のある品」だからやれぬ、と言つても、それは弱くしか響かぬ。なにしろ「今ここに持つてゐる物をなんでも」と、言つてしまったのだから。言い争いになつてからも、先に刀に手をかけて抜こうとしたのは蜂谷の方である。挙句に当て身に絶命してしまふ。

結果的に蜂谷を殺すことになつてしまふので、読者の最初の印象は甚五郎にきびしくなるかと思うが、注意深く読むと、決して甚五郎に武士としての落度はない。

といつて甚五郎が、どこにも欠けるところのない大人さびた武士だつたかといへば、そうではない。絶命した蜂谷をそのままに、姿を消してしまふところなど、やはり十六歳という年齢の未熟さがあらわれている。老練な者ならば、主君の前に出で、身の証しを立てるようなことをするのではないか。

ただ、この逃亡は、たんに若さの無思慮だといふだけで済まない意味を持つてゐるのかもしれないので、この後、家康に取り立てられた甚五郎は、ふたたび家康の前から忽然と消え去るということをやらからである。つまり、ある瞬間に、おのれの置かれてゐる現実から脱け出して、別の空間に身を置こうという衝動に抗し切れず、そのように振舞つてしまふ人物としての佐橋甚五郎、ということも、考え合わせてみた方がよいのかもしれない。とすれば、我々は、佐橋甚五郎という人物を、武士の容儀・倫理に忠実である事を佳しとしつつ、しかし、ある「時」至れば、すべてを放下して飛躍することを辞さぬ、激しく二極に揺れる人間として読むことになる。

そしてこれは、すべて鷗外の創り出したところであつた。ここに扱つた鷗撃ちから出奔までの部分を作るに鷗外が拠つた資料の記述は、次のようなものであり、ここに見る甚五郎は欲望に身をまかせた一人

の犯罪者にほかならない。

当時世に行はるゝ、処の三州後風土記類の偽書に、佐橋甚五郎事岡崎三郎様の御小姓なりしが、傍輩の金熨斗付の大小を盗取、甲州へ行て勝頼に仕ふ事を長々敷書の設置、彼佐橋甚五郎と申は大御番頭佐橋義右衛門義賢、同役義佐橋源大夫か従弟なり、甚五郎と同役の御小姓を故有て殺害し三州に蟄居す。

三 二つの意地

佐橋甚五郎の姿が、資料と作品とでこうまで違えば、家康も、相対的に資料の中とはまったく別の像を与えられることになる。作品では、甚五郎に対する家康の冷淡な態度が、数度にわたつて重ねて叙述されるのに対して、資料ではただの一度だけである。それを挙げておく。

権現様、甘利は甚五郎を一子のことく哀憐を加へ召仕ふる処を、佐橋めはむごひ奴、四郎三郎が寝首を切来、余り情なしと上意ありしを聞て、お下げすみ^{（マツ）}をうけては不勤と御家を立退き、商賈船に乘て朝鮮国に渡る。

資料ではこういう形でしか現われていない家康の甚五郎に対する反応を、鷗外はどう構成してゐるかを確認してみよう。

最初は、甚五郎が蜂谷を仆して逃亡して一年余、従兄が家康に甚五郎の助命を願ひ出たとき。

「そちが話を聞けば、甚五郎の申分や所行も一応道理らしく聞えるが、所詮は間違うてをるぞよ。併しそちも云ふ通り、弱年の者ぢやから、何か一廉の奉公をいたしたら、それをしほに助命いたして遣はさう。

傍輩を殺してしまつた者についての措置ゆえ、これだけを他と切り離して読めば、それほど極端には見えないかもしれないが、それにしても、山崎氏が「どこが間違ひなのか。」と問われるように、私にも「甚

五郎の申分や所行」が「所詮は間違うてをる」ということになるのかがよくわからない。上に記したように、私見ではむしろ蜂谷の方にこそ「間違」いが認められるように思えるのである。「所詮」という一語で、家康は一切の説明を飛び越して、甚五郎を断罪しているという印象が強いのである。ここに、すでに多くの論者のいう家康の、権力者の恣意を見てよいであろう。かく、かなり感情的に甚五郎を罪ある者ときめつけた上、「一廉の奉公」をしたら「助命」してやると、犯罪者からの離脱をも、おのれの利益のための行動の成功を条件とするのである。これはきわめて冷酷な処置といわなければならない。そしてそれは、小山城の城番・甘利四郎三郎を討ち取れという、一人の若者の手には過酷とも不可能ともいふべき命令である。これはすでに、家康の甚五郎に対する悪感情の第二のあらわれであるが、これなどはほとんど死刑の宣告にも等しかろう。

「甚五郎は伶俐な若者で、武芸にも長けてゐるさうな。手に合ふなら、甘利を討たせい。」かう言ひ放つた儘、家康は座を起つた。という鷗外の描写には、家康が甚五郎に一片の好意をも抱いていないことが明示されている。

考えてみれば、この時、まだ家康は、佐橋甚五郎という若者を一瞥もしていない。右の台詞の「さうな。」という伝聞表現に、それがはっきり示されている。そういう人間に、なぜ家康はこころよからぬ感情を抱いているのか、まったく理由はわからぬ。むしろ「伶俐」で「武芸にも長けてゐる」若者なら、積極的に取り立てようとしてもよいのではあるまいか。それを家康はあえて死地へ送り出すのである。「こ言ひ放つた儘」「座を起つ」家康に、甚五郎に対する冷酷さだけでなく、一人のすぐれた若者をいわれなく死なせようとしている自己への嫌悪を読むのは、過大な感情移入であらうか。

甚五郎の所為に疵がないわけではないが、しかしその基本は、へ武士に二言なし」という規律を遵守しようと意志するところにあつたこと

はすでに述べた。そしてこのノルムは、むしろ上位者においてこそ、意味の大きいものであつただろう。なぜならば、このノルムには反逆を阻止する力が、ひそやかに浸みこませてあるからである。下位者は、ひとたび上位者に忠誠を誓えば、二言なきことよって決して離反できぬのである。このノルムを下位者に遵守させることは、上位者にとって必須の事だつたはずである。それ故、「誓言」を守ろうとした甚五郎を咎めることは、武士社会の基本条件を危うくする所為になるであらう。にもかかわらず家康が、甚五郎を許さぬのは、上位者の計算された思慮というよりは、一人の人間の感情の所産であり、その悪感情は、明確な源泉を持たない。「いわれなき嫌悪」と私は読む。そして人間は、時にそのような「いわれなき」ものに捉えられてしまうものである。家康は武士のノルムに反してまでもおのれの感情にこだわり続ける。それが家康の「意地」となつて、終生甚五郎を許容しないのだが、家康の「意地」は、むしろ俗に言う「意地っぱり」に近く、精神のレベルに遠い。

しかし、にもかかわらず、上位者の位置は容易に揺ぐものではない。おのれの感情を命令に変質させることができる立場だからである。下位者は、「所詮は」罪ありと誣いられ、その罪をつぐなうために課せられたペナルティーを懸命に、——命を懸けて遂行せねばならぬ。甚五郎の甘利討ち取りは、彼の全能力を傾けつくして得られたものだ。「鼯鼠のように身軽に」小山の城を脱出してきたとは、鷗外の比喩だが、こういう表現に全智全能を挙げて行為者となつた甚五郎を捉える鷗外の眼が感じとられよう。

かくて、おのれが死を命じなくても甚五郎は死ぬるであらうと考えた家康の予想はくつがえつた。それは、どうしても落ちなかつた小山の城が、今や城番を失つて一気にもみつぶしうる状態になつたことをよろこぶ心をおおつて、家康には不快だつた。

家康は約束通り甚五郎を召し出したが、目見えの時一言も甘利の

事を言わなんだ。

みづから発した命令——それも、これまで討ち悩んでいた、「三河勢の手に余った」甘利四郎三郎を、見事に討ち取って戻ってきた者に対するこの仕打ちは、どうみても尋常ではない。よほど家康は、この佐橋甚五郎という若者を認めたくなかったのだ——と、やはり鷗外は書いていっているといつてよいであろう。若御子の戦いでも甚五郎は奮戦して手柄をたて、確かに知行に加増はあったが、他の者にあった家康からの褒詞はとうとう彼にはなかったと、家康の甚五郎無視が依然として続いていることを示し、次に遂に甚五郎をして家康を見限らせる出来事——「むごい奴」ゆえ油断できぬから「手放しては使ひたう無い」という家康の発言を、甚五郎が耳に入れてしまう場面があったと、鷗外は筋を展開する。

ところで、この家康が甚五郎を認めまいとするプロセスについて、一部に誤解があるようである。例えば尾形氏は、「甚五郎はその伶俐さと敏捷さをもつてその契約を果した。しかし、家康に対する契約の履行すべては、家康から黙殺される。」と記しておられるが、これは違うのではないか。家康は「黙殺」はしていない。甘利を討ち取った取り立ててやろうという約束は守っている。若御子の戦いでも、手柄に見合うだけの加増はしている。ちゃんと〈手当て〉はしているのである。山崎氏が「家康は甚五郎の帰参は約束通り認めているし、年功に於ても加増という物質面では公平な処置を取っている。」と記しておられるのに賛同する。だが続けて、「しかし家康は人間的情愛を切り捨ててている。」といわれる点は私としては次のように言いたい。表だっては家康の措置に手落ちはないのである。だが、不足していたものがあった。ことにも甚五郎のような、(武士に二言なし)つまりはおのれの言葉におのれの誠をつくすというノルムを固く守ろうとする人間にとつては、何よりも大切な「賞美の詞が無かつた」のである。甚五郎が欲しかったのは言葉という無償のものだった。主を主と思ひ懸命に仕

えること、かかる部下に天晴れだと言葉をかけること、そこに互の忠と誠があり、言葉に二つなきことが誓われうる。しかし、主が主たることを放棄したとき、従者は果していかにあるべきか。甚五郎は思い悩んだであろう。容易には結論を出せなかった。しかし、これもまた家康の方からきっかけを作る。「あれは手放しては使ひたう無い。此頃身方に附いた甲州方の者に聞けば、甘利はあれを我子のやうに可哀がつてをつたげな。それをむごい奴が寝首を掻きをつた。」しかし、甚五郎に課せられたのは甘利を討ち取ることで、山崎氏もいわれるごとく、その方法如何はどうでもよかつたはずである。それを家康はすり換える。何がなんでも、甚五郎の存在を認めないという、かたくなな意地である。武士の意地を貫くためには、最早、家康の許に居てはならぬとの決断が、この時甚五郎の心に下る。しかし、ただに家康の前から姿を消すのだったら何の意味もない。やがては天下人たらんとの野望を抱いている主も一人の男ならば、おのれも男一匹、目にも見せん。その意地が、余人には思いもつかぬ朝鮮への渡航、そして朝鮮高官となつて悠々と家康の前に姿を現わすという形に結実するのである。その一瞬のために、甚五郎は四十七年の人生を供儀とするのである。

ところで、この朝鮮人になりすまし、ことにも上々官という高級官僚になるといふ件、小説としては面白いし、それなしに作品「佐橋甚五郎」は成り立たないのだから、鷗外の設定に添って読んでゆくほかないのであるが、崔博光氏によつて、こういうことは朝鮮の歴史から見てはありえないという見解が示されている。⁹¹⁾「上々官の場合、身分は中人(両班階級の次に位する階級)でありながらも、中人としては、最高階級である三品(位)以上の人である。普通の人が陞進する階級ではない。(略)当時の戸籍制度を見ても、訳官試験及びに養成制度から考えて見た場合、日本人という身分をかくすことはとても無理な話である。」と氏は言われる。確かにいくら甚五郎が「敏捷」で「心の利いた」人間であつても、まず言葉から不自由で、長く独自の伝統を培

つていて風俗習慣も異なる隣国へ渡つて、二十三・四年で中人の階級に紛れ込み、その上、友好使節の上々官として選ばれるというのは、ありえぬ事というのが本当であろう。崔氏によれば、朝鮮側の正式記録でも、上々官は朴大根・金考舜の二人だそうである、それは我国の資料（たとえば鷗外が参看した「韓使来聘記」）と同じである。

だがあえて鷗外は、『通航一覽』の、家康が使節団の一人を目して「あれは佐橋甚五郎なり」といったというその記事に着目して、上々官を三人に増員し、朴・金の他に、喬を登場させたのである。こういう形で鷗外は、甚五郎の意地を、花開かせたのである。いわば鷗外は、歴史的事実をまげること代価に、人間的眞実を描かんとしたのである。

とりわけ朝鮮語に堪能だったわけでもなからう一人の若者が、突然に朝鮮に渡り、二十余年の後に、政府派遣の高官として来日するといふのは、歴史の定めとしてはありえぬことなのだろうが、にもかかわらず、この、ありえぬことをありうることにして作中人物、甚五郎に、その執拗きわまる意地を読むのは、小説読みの至極の楽しさである。

おのれの存在を足もとから否定された甚五郎が、その存在をいかに揺ぎないものとしてかつての主の前に提示するか。「喬」とあえて名乗つた甚五郎は運よく隣国の人と化して生活し、来日の機をうかがう。好便にも日朝国交回復、使節団が渡海することになる。そして三人の上々官の中に選ばれる。事は着々と望ましい方向に進んでゆく。さて、あの家康をして、心中にあつといわせるにはどうしたらよいか。いや、あえて何か特別な事を為すまでもない、人一倍細心なあの男のこと、何をせずとも向うから見事に俺を見抜くだろう、そしてその明敏な個性が、その一瞬、彼自身を傷つける刃になるだろう。俺は何をせずともよい。一人の訳官として彼の前に立ち現われてやればよい。何の表情も示す必要はない。ただ黙つて立つだけでよい。だが彼も今や七十歳に近く、老も進んでいるやもしれぬ。目の前の俺に気づかぬかもしれぬ。そんなことになったら俺の二十余年の血のにじむ過去は空しく

なる。何としても、己が彼の前に出沒したということは知らしめねばならぬ。佐橋の家に上等の朝鮮人参を沢山贈つておいてやろう。自然それが噂となつて彼の耳にも入った時、その時彼は臍を噛むことになるだろう――。

かかる甚五郎の予断は的中する。家康は見露わした甚五郎を、国際友好使節団中の人物ゆえいかんともしがたい。佐橋の家にはこれみよがしに人参を送りつけることまでしたらしいが。家康に出来ることは、使節団を一刻も早く帰国させることだけだった――。

かかる読みが成立するのは、くり返すが、喬僉知が佐橋甚五郎その人であつたという条件を認める限りにおいてである。それを鷗外が、一見、曖昧と錯誤させるように書いたのは、喬僉知なる甚五郎が、おのれの正体を見破られるのは、ただ一人家康によつてだけであればよいとするからである。余人にはむしろ気づかれない方がよい。何の予告もなしに、突然、あれは甚五郎ぞ、と、家康ひとり愕然とするのが最も望ましいのである。隠れつつ顯われ、顯れつつ隠れる。その微妙な氣息を、作者は読者にも体感させようというのである。それらのために鷗外は曖昧に近づく危険を犯したのである。

「佐橋甚五郎」は即物的な筆致で終始している。しかしこれは、心理小説なのだと私は思う。むしろ普通にいうそれではない。作者は心理描写など一行もしていないからである。だが、へいわれなき嫌悪へ「顯の感覺」というモチーフにしる「意地」というテーマにしる、みな合理的の埒外――心理の暗い野に生まれた無償の情熱である。そこに人間の（おのれ）が、その形を臍ろげに現わしてくる。作者は意識して心理に触れず、それを読者の読み取りにゆだねている。それが成立した時、はじめて「佐橋甚五郎」は「読まれた」ことになるのではあるまいか。この作品に「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」に至らざる点があるとするれば、おのれの信じ欲するところを行なう甚五郎に、おのれをふ

りかえり見ることがない点であろう。おのれを信じつつ、なお疑いかけりみる——そこにはより、暗い人間のこころの野が広がっているのだ。

四 残る問題二、三

以上が私の「佐橋甚五郎」読解の中核である。その論脈にのぼらなかったもので、なおこの作品で考えておくべき問題がある。それを以下に記しておく。

(1) 小山城月見の宴で唱われる歌について

三河の水の勢も

小山が堰けばつい折れる

凄まじいのは音ばかり

と一座が唱いどよくと鷗外は記している。この歌はどの資料にもなく、鷗外の創作であろう。この歌に注した尾形氏は「今様形式から出た室町小歌の声調に模して鷗外の創作したもの」と記された。まことに適切な教示だと思う。私はまったく別方向のことを記してみたい。私はこの歌から鷗外の別の創作歌を想起したのである。それは日露戦争中の明治三十八年一月奥保鞏大将麾下の第二軍新年宴会に唱われたものという「箱入娘の歌」である。これは全五節、各節とも七七、六行。ここでは略して第一節と第四節を引いておく。

西施楊貴妃生ませた親の 自慢娘の旅順ぢやけれど

昔くどいたらつい落ちたのを いつか忘れて養女にいつて

唱合 今ぢやロシヤの箱入娘 おちぬ噂が世界に高い

今ぢやロシヤの箱入娘 落ちぬ噂がよし高いとて

昔し落した馴染ぢやものを 今度落さにや男が立たぬ

唱合 落ちぬ靡かぬ名代の娘 日本男子が落して見せう

一方は作品中の、他方は現実のという違いはあるが、ともに戦場で

の宴の歌という共通性があり、七五調と七七調と声調に違いはあるものの、実際のその効果はそれほど異ならず、相手を揶揄挑発しおのれを誇ろうとする措辞や、あえて平俗な縁語や連想・比喻を駆使して広く大衆の感覚に共鳴させようとする発想法は、双方に共通する。そういう性格の歌としては、共に見事に出来上っているといえよう。

南山の たたかひの日に

袖口の こがねのぼたん

ひとつおとしつ

その扣紐ほたん惜し

べるりんの 都大路の

ぱつさあじゆ 電燈あをき

店にて買ひぬ

はたとせまへに

(「扣紐」全五節中の第一節・第二節)

同じ戦場で、同時にかかる抒情詩を作っていた人の作品とは一見思えぬが、しかし鷗外の感覚の奥の一隅には、まぎれもなく日本人の、ことも衆をなした時に発動する感覚が生きていたことを、これら二つの創作歌は示しているよう。

(2) 甘利四郎三郎殺害場面の受けとめ方について

甚五郎が甘利を刺殺する場面が、まことに印象深く描写されていることは、誰もが認めるところであろう。が、その評価はまた先蹤において、二つに分かれる。

月の夜に吹く笛、鳴く虫の音、といった優雅な風趣のなかで、虫も殺さぬ若衆(甚五郎)が、血なまぐさい默劇を演ずる。かえって凄惨きわまりない。(稲垣氏)

簡潔で美的でさえもある描写になっているが、基本的に行為者の残虐さが露呈しているのは否定できない。(竹盛氏)

に代表される凄惨・残虐説と、

鷗外は、この一節を前段の節と諧調を異にした、幻想的な場面としてきわだたせることに成功した。そのことが、凄惨なるべき刺殺場面を不思議に甘美なものにし、甚五郎の行為に伴う残虐感を消し去っている。(尾形氏)

という甘美説である。

ある対象を、凄惨・残虐と感じとるかそうは感じないかは、受けとめる者の感覚や想像力や習慣などの質によって違ってくるものであるから、一律に考えることはできないであろう。だが、この場面は、所詮は人が人を刺し殺すという尋常ならぬ場面、それはどうしても凄惨・残虐であるほかはないのである。それを凄惨と感じ残虐というのは当然といえよう。しかし問題は、行為そのものにあるのではなく、作者がそれをどのように表現しているかということにある。あえて凄惨さを強調し、行為者の残虐をクローズアップしているか、それとも、そのような感じを抑制するように書いているか、ということである。その場合、私は尾形氏の驥尾に付したい。

甘利は夢現の境に、寛いだ襟を直してくれるのだなと思つた。それと同時に氷のやうに冷たい物が、たつた今平手が障つたと思ふ処から、胸の底深く染み込んだ。何とも知れぬ温い物が逆に胸から咽へ升つた。甘利は気が遠くなつた。

一瞬、胸奥に冷たいものを感じはしたが、酔余の快いまどろみの延長として、甘利は甘い睡りに落ちて行くように死ぬのである。

問題は「描かれる事」と「描かれ方」を区別して考えねばならぬというところにある。ここで鷗外は、甚五郎が首尾よく使命を果たさんと懸命になつてゐる姿を描くべく筆を運んでゐるのであつて、事の凄惨さや甚五郎の残虐な性格を描くことの意識はないのだと思う。焦点

は冷静・迅速・正確にある。いうなれば、手術にのぞんだ外科医のごとく甚五郎が動いているさまを、読者に感得させるやうに鷗外は書いてゐる。それは無駄なく型にはまっていなくてはならぬ。ある種の美がそこに現出するのは当然である。

須田氏はこの鷗外を、レニエ「復讐」を踏まえたのではないかと推測され、大変興味深いが、私はかかる鷗外を次に芥川が学んだのではないかと推測している。

おれはやつと杉の根から疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。唯胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまつた。ああ、何と云ふ静かさだらう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに来ない。唯杉や竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、——それも次第に薄れて来る。——もう杉や竹も見えない。おれは其処に倒れた儘、深い静かさに包まれてゐる。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとしたり。が、おれのまはりには、何時か薄闇が立ちこめてゐる。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまつた。(「藪の中」)

「佐橋甚五郎」大正二年四月発表、「藪の中」大正十一年一月発表。その前年大正十年から下肢に浮腫を見た鷗外は、おれの死期のそう遠くないことを感じつつこの十一年一月も帝室博物館と図書館に通つてゐた。日記「委蛇録」には参館、参寮という語がほぼ一日おきに並んでゐる。果して鷗外は「新潮」に載つた「藪の中」を読んだであらうか。

(3) 甚五郎が身につけていた「小判百両」について

甚五郎が家康の「あれは手放しては使ひたう無い」。云々という言葉を読めば聞いて、今は、と家康の許を去るという場面で、鵜外はこう書く。

甚五郎は此詞を聞いて、ふんと鼻から息を漏らして軽く頷いた。そしてつと座を起つて退出したが、兼て同居してゐた源大夫の邸へも立ち寄らずに、それ切り行方が知れなくなつた。源大夫が家内者の話に、甚五郎は不断小判百両を入れた胴巻を肌に着けてゐたさうである。

身の廻りの品に一つも手を着けず、身柄だけ消えてしまふ。何とも見事な出奔ぶりである。かねて甚五郎が、家康に心服しえないものを感じ続けていたこと、ある時が至れば、ただちにおのれの欲するままに行なうべく、常日頃から準備していたらしいこともわかる。それが「不断小判百両を入れた胴巻を肌に着けていた」に集約されている。もちろんかかる記述は依拠資料には見えない。鵜外の企画による。といつても、「百両」は初出の「中央公論」四月号の文にはなく、六月、作品集「意地」にまとめた際に挿入されたのである。ところで、これとまったく同じといつてよい設定を、鵜外は後にふたび採用している。二年半ほど後、大正四年九月「新小説」に発表した「ぢいさんばあさん」においてである。ぢいさん事美濃部伊織が、若い時、京の町で「好い古刀」を買う場面である。代金は百五十両である。そこで鵜外はこう書く。

伊織の身につけては容易ならぬ大金であつた。(改行)伊織は万一の時の用心に、いつも百両の金を胴巻に入れて体に附けてゐた。それを出すのは惜しくはない。しかし跡^{あと}五十両の才覚が出来ない。まったくの同趣同工である。面白いことである。まさに甚五郎も「万一の時の用心」をしていたに違いないのである。こういう設定を二度もくり返す鵜外に、心に鬱勃たるものがあり、そのための心準備を日

頃からしておくというひそかな心構えでもあつたのだろうか。勝手な推測をしてみたくなる。それはともかくとして、小判百両をいつも身につけておくということは、はたして可能だったのかどうかと、紙幣中心の生活をしている者としては疑念が湧く。「小判百両」はかなり嵩ばるであろうが、洋服と違って和服の場合には、それほど目立たぬ工夫ができるかもしれない。重量はいかがであらうか。近世での小判の標準は、金四十四匁からその一割を鑄造費として引き、それに銀八匁を加え、四十七匁六分で、十枚を鑄造するのだという。一匁は三・七五グラムだから小判百両の重量は一キロ七八五グラムということになる。かなり持ち重りがするだろう。だが甚五郎にしろ伊織にしろ、武士のことゆえ、不断に身につけていられぬという重さではないかもしれない。

だが次に、二十三歳の若者甚五郎に、百両の貯えがあつたという設定はどうだろうか。少し無理、という気がしないでもないが、この小説では、早く稲垣氏も指摘されたごとく一切の背景が描かれず、佐橋家の経済状態についても、作者はまったく触れるところがない。ということは、逆に、いかようにも考えられるのであつて、佐橋家が富裕であつたのだとしておけば、落着くであろうか。いずれにしても、家康の前から瞬時に完全に姿を消すためには、かなりの経済力を持っていることは大前提で、それも朝鮮へ渡つたとなれば尋常の額では収まらなくなるのは確かなことである。

ところで、甚五郎が姿を消すこの時を、作者は天正十一年としている。果してこの時期、小判は存在したのだろうか。横井時冬の『日本商業史』(初版大正十五年、ここでは一九八二年四月一〇日原書房より出た復刻版による)には、「天正の初織田信長大判金を製し後藤某をして極めしむこれを大判の始とす天正十五年豊臣秀吉銀銅銭を鑄る文を天正通宝といふ同じき十六年大判金小判金を製し後藤光次をして墨書墨判せしむ大判に天正大判金菱大判金大閤大判金大佛大判金等の種類あ

着記」という言い方はどうか、などと考えつつ、ほとんど無意識に梓でかこってしまったのではないかと思わせられる。そして「来聘記」の方が好いと考えて線を引っぱって「来聘記」と記したのではないか。そしてこの線に添って読めば、はつきりと「韓使来聘記」ということになって、鷗外の記す書名になる。ひよつとすると鷗外はこの一冊本を参看する機会があつたのではなからうか。曲線の途中の小さな丸印はよく判らないが、これも我々がよくやる、個条書き風に何かを書く

時に、頭に丸印をつけてから始める、それに似ている。また、右上部の「歴朝来聘」が正式の書名かとも思われる。

尾形氏が「朝鮮通信総録」「歴朝来聘覚」と記された後者は、この「歴朝来聘」のことではなかったか。『朝鮮通信総録』に収められた方に「歴朝来聘覚」と記されてあつたので、ついその形で記してしまわれたのではあるまいか。

- (1) 「佐橋甚五郎―意地―」(『森鷗外の歴史小説―史料と方法―』所収、筑摩書房 昭和五十四年十二月二十日、ただし初出は「文学」昭和三十九年十月号)
- (2) 『森鷗外歴史小説資料集』(その三)佐橋甚五郎(私家版 昭和五十六年四月二十日)
- (3) 「佐橋甚五郎」攷(『跡見学園女子大学国文学科報』第十二号 昭和五十九年三月十八日)
- (4) 「佐橋甚五郎」(『国文学』学燈社 昭和三十一年十月号)
- (5) 「鷗外の歴史小説(二)」(『大谷学報』第三十三卷第三号 大谷大学 昭和三十九年三月)
- (6) 「鷗外「佐橋甚五郎」論」(『日本近代文学』第二十七集 日本近代文学会 昭和五十五年十月)
- (7) 「鷗外と創作集「意地」―阿部一族―」(『興津弥五右衛門の遺書』佐橋甚五郎)、『信州白樺』第四十一・四十二合併号、信州白樺 一九八一年四月一〇日)
- (8) 「佐橋甚五郎」鑑賞(『近代文学鑑賞講座第四卷森鷗外』角川書店 昭和三十五年一月十日)
- (9) 「森鷗外―作家と作品―」(筑摩書房 昭和三十九年八月二十日、ただし初出は「文学者」昭和三十四年二月号、四月号、八月号、十二月号)
- (10) 「佐橋甚五郎」論(『森鷗外―その歴史小説の世界―』中部日本教育文化会 昭和五十年六月十日)
- (11) 「佐橋甚五郎」(『現代国語研究シリーズ6 森鷗外』(尚学図書 昭和五十一年五月二十日)
- (12) 「森鷗外―文業解題・創作篇」(岩波書店 一九八二年一月二二日、ただし初出は、岩波書店刊『鷗外選集』解説。本創作篇は第一巻、第十三巻、第二十一巻の解説を「総括・補訂」したもの)
- (13) 三百五十巻、大学頭・林輝の編 永祿九年から文政八年にいたる海政事項を編年体にとめたもの。明治四十五年から図書刊行会により活字本刊行。「佐橋甚五郎」の中心的な依拠資料と考えられる部分は「巻之八十七」で、図書刊行会本の『通航一覽』第三(大正二年二月二十八日刊)の冒頭に収められている。尾形氏はこの刊行日付ならびに鷗外の「佐橋甚五郎」脱稿日付大正二年三月九日から、本書刊行直後に執筆したかと推定される。
- (14) (7)に同じ。
- (15) 塙新書22(塙書房 一九六八年一〇月二五日)
- (16) (13)の図書刊行会本による。
- (17) 右に同じ。
- (18) 拙稿「(いわれなき嫌悪)」というモチーフ―「半日」理解のための一つの補助線」(『国語国文研究』第七十号、北海道大学国文学会 昭和五十八年八月)を参照いただければ幸である。

- (19) 「佐橋甚五郎は実在したか」〔比較文学研究〕第四十号 東京大学比較文学会 一九八一年二月一〇日
- (20) 筑摩書房『森鷗外全集』第三卷（昭和三十七年四月三十日）所収「佐橋甚五郎」の語注（八八）。また角川書店『日本近代文学大系』第十二卷 森鷗外集Ⅱ（昭和四十九年四月三十日）の頭注にも同趣のことあり。
- (21) (6)に同じ。